

日韓聖公会 歴史断章——詩人・尹東柱^{ユンドンジュ}を中心に

2010年2月26日

司祭 ヨハネ 井田 泉（京都聖三一教会）

1. はじめに

最初に個人的なことを話すのをお許しいただきたい。私が日韓聖公会の交流に関わり始めたのは1985年、第2回日韓聖公会宣教セミナーの準備段階からである。それから25年、すでに四半世紀が過ぎた。あの時、35歳の青年であった私もすでに還暦を迎えることになった。さまざまなことを思い出す。

私は東京の聖公会神学院を卒業して33年、司祭按手を受けて30年あまりになる。そのちょうど中間に、日本聖公会にとっても私自身にとっても決定的に大きなことがあった。それは1995年、清里で行われた日本聖公会宣教協議会における戦争責任の告白・懺悔であり、翌年1996年、日本聖公会第49（定期）総会における日本聖公会の戦争責任に関する宣言決議であった。私は思いを同じくする人々とともに、このことのために司祭として、神学校教師として、また歴史研究者としてできる限りの努力をした。韓国聖公会との交流がなかったら、このような決議は実現できなかっただろう。戦争責任宣言の決議がその後必ずしも十分に生かされていないとはいえ、日本聖公会の中に、信仰的良心の痛みから教会が再出発して新しい宣教の使命を引き受けようとする基礎が据えられたという点で、大きな意味があると考えられる。

韓国聖公会との交流が与えられてきたことに対して、感謝を申し上げたい。

1910年の韓国併合から100年、日本が韓国に大きな痛みを負わせ犠牲を強いた100年（実際はそれ以上長い）を記憶しつつ、今日は一つのことを中心にお話したい。それは、1945年2月16日に日本で亡くなった韓国のキリスト教詩人、尹東柱^{ユンドンジュ}のことである。今日は2月26日、今から65年と10日前に彼は日本の福岡刑務所で獄死した。遺骨は父、尹永錫氏の手で抱かれて戻り、国境の川、豆満江を渡った。尹東柱の弟、尹一柱氏はその時のことを次のように記している。

「遺骨はそこで父の胸から私が受け取り、長い長い豆満江の橋を歩いて渡った。2月末のとても寒く、曇った日、豆満江の橋はどうしてそんなに長く見えたのか——。皆、それぞれの心の怒りを抑えて黙々と渡った。ひとことの言葉もなかった。」（「ナラ・サラン」23号）

ちょうど今の季節である。

2. 尹東柱とダビデの詩編

1917年、北間島^{ブッカンドミョンドン}明東村に生まれた詩人・尹東柱は、1941年12月、延禧^{ヨンヒ}専門学校を卒業した。在学中に書かれた「十字架」「星を数える夜」「序詩（無題）」等には、日本統治下の苦悩と信仰的決意が現れている。彼はさらに学びを続けるため1942年2月か3月、日本に渡ったが、そのためには「平沼^{ひらぬま}東柱^{とうちゅう}」と創氏改名しなければならなかった。

彼は4月2日、聖公会系の立教大学文学部英文科に入学した。その直前、尹東柱は東京で友人の金禎宇^{キムジョンウ}と会った。金禎宇の回想によれば、尹東柱は彼に「ダビデの詩編をよく読むように」と勧めたという。言い換えれば、尹東柱自身がダビデの詩編を愛読し、そこから力を得ていたと考えて間違いない。ダビデの詩編の一つを読み、尹東柱の思いに近づきたい。

詩編第57編

- 1 【指揮者によって。「滅ぼさないでください」に合わせて。ダビデの詩。ミクナム。ダビデがサウルを逃れて洞窟にいたとき。】
- 2 憐れんでください／神よ、わたしを憐れんでください。わたしの魂はあなたを避けどころとし／災いの過ぎ去るまで／あなたの翼の陰を避けどころとします。
- 3 いと高き神を呼びます／わたしのために何事も成し遂げてくださる神を。
- 4 天から遣わしてください／神よ、遣わしてください、慈しみとまことを。わたしを踏みにじる者の嘲りから／わたしを救ってください。
- 5 わたしの魂は獅子の中に／火を吐く人の子らの中に伏しています。彼らの歯は槍のように、矢のように／舌は剣のように、鋭いのです。
- 6 神よ、天の上に高くいまし／栄光を全地に輝かせてください。
- 7 わたしの魂は屈み込んでいました。彼らはわたしの足もとに網を仕掛け／わたしの前に落とし穴を掘りましたが／その中に落ち込んだのは彼ら自身でした。
- 8 わたしは心を確かにします。神よ、わたしは心を確かにして／あなたに賛美の歌をうたいます。
- 9 目覚めよ、わたしの誉れよ／目覚めよ、豎琴よ、琴よ。わたしは曙を呼び覚まそう。
- 10 主よ、諸国の民の中でわたしはあなたに感謝し／国々の中でほめ歌をうたいます。
- 11 あなたの慈しみは大きく、天に満ち／あなたのまことは大きく、雲を覆います。
- 12 神よ、天の上に高くいまし／栄光を全地に輝かせてください。（新共同訳）

この詩人は命の危機にさらされる中で神を呼ぶ。敵の暴力に屈服せずに自らを励まし、主を賛美し、神の栄光の現れを祈り求める。当時日本は、韓国の歴史、文化、言葉、名前、そして命を奪いつつあった。この詩編の中に尹東柱は、自分と自分の民族の苦しみを重ね、またここから希望と励ましを得ていただろう。

3. 尹東柱の立教時代

尹東柱の立教時代の詩は 5 編のみが残っている。これは彼が、延禧時代の親友である 姜処重^{カンチョジュン} に送った手紙の中に入っていたもので、姜処重がこれを大切に保存していたので残ったものである。

その年 1942 年の夏、彼は北間島 龍井^{ヨンジョン} に帰省したが、その時の写真は丸刈りである。彼は延禧時代は髪を伸ばしており、また一緒に写っているいとこの宋夢奎は長髪である。なぜ尹東柱は髪を刈り上げているのか。ここから尹東柱の日本聖公会の関係につながっていく。以下、立教時代における尹東柱のことは、楊原泰子さん（立教大学文学部卒）の調査によって明らかにされたことである。

尹東柱が立教大学に入学して 8 日後、1942 年 4 月 10 日発行の『立教大学新聞』に「学部断髪令 4 月中旬実施」という記事がある。戦時体制に合わせて質実剛健な気風を奮い起こそうという目的で、学生たちの髪を刈らせたのである。

当時、立教大学には陸軍大佐・飯島 信之^{のぶゆき} が配属され、軍事教練を学生に強制していた。飯島大佐は「おれは耶蘇はきらいだ」「立教はミッション系だから、アメリカ人のための第五列（スパイ）が活躍する可能性が高い大学だ。それゆえ大学内を徹底的に変革せねばならない」と主張し、また文学部を「文弱部」と呼んで嫌っていたという。その軍事教練を、ある証言によれば、尹東柱は拒否していたという。

尹東柱は立教の同級生、石川俊夫氏（当時は宗教学科所属。後に立教高校の先生）の紹介で、文学部宗教学科の教授で大学チャプレンでもあった日本聖公会司祭・高松 孝治^{たかまつたかはる} 教授の自宅を訪ね、何度も交流を持った。同氏の証言によれば、尹東柱は軍事教練の服を着ていなかったという。尹東柱は軍事教練に参加することに抵抗を感じ、それについて高松司祭に相談した。高松先生は「わたしも明日はどうなるかわからないが、神に祈っているから」といって尹東柱を激励したという。尹東柱は軍事教練に参加しなかったため、非常な圧迫を受けたに違いない。

高松教授は軍国主義に反対の思想を持っていたため当局から激しい圧迫を受け、やがて病に伏し、日本の敗戦後 1946 年 2 月 13 日に亡くなった。死因の一つは栄養失調だという。高松司祭は京都聖マリア教会で司牧していたこともあり、現在も京都教区では 2 月の教区関係逝去教役者記念聖餐式で記念している。

ところで当時、立教大学と聖公会神学院は隣接していた。1940 年以前は、神学院の神学生は立教の宗教学科と二重学籍の制度になっていて、その名残が尹東柱当時もあったようである。立教大学文学部英文科に所属する尹東柱は、聖公会神学院の授業にも出席し、神学院の黒瀬保郎教授のお茶の会に参加していたという。

先ほどの石川氏のほかにも、聖公会神学院あるいは宗教学科で尹東柱と一緒に授業を受けていた、また交流のあった数人の名前がわかっている。矢沢信夫（後、司祭）、張（村）順姫（神学生）、黄（名は不詳）——これらの方々は聖公会神学院の学生寮にいた。

このように尹東柱は日本聖公会と直接の出会いがあったことを記憶したい。

立教時代の尹東柱の詩のひとつを紹介する。

쉽게 씌어진 시

창밖에 밤비가 속살거리
육첩방은 남의 나라,

시인이란 슬픈 천명인 줄 알면서도
한 줄 시를 적어 볼까.

땀내와 사랑내 포근히 품긴
보내주신 학비 봉투를 받아

대학 노-트를 끼고
늙은 교수의 강의 들으러 간다.

생각해 보면 어린때 동무를
하나, 둘, 죄다 잃어 버리고

나는 무얼 바라
나는 다만, 홀로 침전하는 것일까?

인생은 살기 어렵다는데
시가 이렇게 쉽게 씌어지는 것은
부끄러운 일이다.

육첩방은 남의 나라
창 밖에 밤비가 속살거리는데,

등불을 밝혀 어둠을 조금 내몰고,
시대처럼 올 아침을 기다리는 최후의 나,

나는 나에게 작은 손을 내밀어
눈물과 위안으로 잡는 최초의 악수.

1942. 6. 3

たやすく書かれた詩

窓の外には 夜の雨がささやいて
六畳の部屋は ひとの国

詩人というのは悲しい天命であると知りつつも
1 行の詩を書いてみるか

汗のにおいと愛のにおいの ふくよかに漂う
送ってくださった学費封筒を受け取って

大学ノートを脇に抱えて
老いた教授の講義を聞きに行く

考えてみれば 幼いときの友を
ひとり、ふたり、みな 失ってしまい

わたしは何を願って
わたしはただ、ひとり沈むのか

人生は生きがたいというのに
詩がこのようにたやすく書かれるのは
恥ずかしいことだ

六畳の部屋は ひとの国
窓の外に夜の雨がささやいているが

灯火をともして 闇を少し追いやり
時代のように来る朝を待つ 最後のわたし

わたしは わたしに 小さな手を差し出して
涙と慰めで握る最初の握手

この「老いた教授」とは当時 68 歳の宇野 哲人^{てつんど} 教授であり、授業は「東洋哲学史」であったことが明らかになっている。一緒に受講したのは 5 名で、彼のほかに矢沢信夫氏（後、司祭）、張順姫氏、石川氏、もうひとは不明とのことである。

配属将校を通して大学に対する軍部の圧力は次第に強まり、同じ年 9 月、立教学院は定款の第 1 条から「基督教主義ニ基ツク」を抹消、「皇道ノ道ニヨル教育ヲ行フ」ことを目的としてうたうことになった。10 月には礼拝堂が閉鎖された。

4. 尹東柱の十字架

こうした中、尹東柱は夏休みの帰省の後、10月には同志社大学英文科に移った。翌年1943年7月14日、京都の下鴨警察署(特高)は彼を逮捕した。治安維持法違反、独立思想を鼓吹したというのが理由であった。しかし彼は組織的独立運動をしたわけではない。韓国の歴史、言葉、文化が奪われ、失われていく状況に対して、民族の独立を願っただけである。しかしハングルで詩を書くこと自体が犯罪であった。彼が京都で書いたはずの詩は書物やノート類と一緒に押収され、行方は分からない。次の年、1944年3月31日、京都地方裁判所は彼に懲役2年の判決を下した。彼は福岡刑務所に収監され、強制労働をさせられ、虐待、拷問を受け、翌年1945年2月16日午前3時36分、福岡刑務所北三舎2階独房108号室で絶命した。

十字架

쫓아오든 햇빛인데
지금 교회당 꼭대기
십자가에 걸리었습니다.

첨탑(尖塔)이 저렇게도 높은데
어떻게 올라갈 수 있을까요.

종소리도 들려 오지 않는데
휘파람이나 불며 서성거리다가

괴로웠던 사나이
행복한 예수 그리스도에게
처럼
십자가가 허락된다면

모가지를 드리우고
꽃처럼 피어나는 피를
어두워 가는 하늘 밑에
조용히 흘리겠습니다.

1941. 5. 31

十字架

追いかけてきた日の光が
いま 教会堂の尖端
十字架にかかりました。

尖塔があれほど高いのに
どうして登ってゆけるでしょうか。

鐘の音も聞こえてこず
口笛でも吹きつつ さまよい歩いて

苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストにとって
そうだったように
十字架が許されるのなら

^{こうべ}
首を垂れ
花のように咲きだす血を
暗くなってゆく空の下に
静かに流しましょう。

この詩のとおりには尹東柱は逝った。1995年2月16日、尹東柱逝去50年を期して同志社大学キャンパスに尹東柱の詩碑が建てられた。毎年、この日に近い日に献花式と催しが行われている。これは韓国、北朝鮮、在日韓国人、日本人が、思想や立場の違いを越えて尹東柱を通して交流する大切な機会である。立教大学でも尹東柱を記念する行事が継続的に行われている。

尹東柱の生涯と詩は、闇の時代の中に光を放っている。真実の光、真理の光である。それは60年前、70年前だけのことでなく、今の時代、ことに歴史の美化、正当化を図ろうとする力が大きくなっている今日の日本の状況の中でとりわけそうである。

首を垂れるべきは、彼の命を奪ったわたしたち日本人である。にもかかわらず尹東柱は、日本人を友として、一緒に十字架を仰がせてくれる気がする。

5. おわりに

今回伝えたかったのは、65年前の2月、日本で獄死した尹東柱という詩人が、日本聖公会と出会っていたということである。私が尹東柱から受けたものと韓国聖公会から受けたものとは、私の中でつ

ながっている。

私は 1987 年にこのような短い文を書いた。

「5月 11 日から 14 日まで、大韓聖公会ソウル教区の ^{キムソンズ} 金成洙 主教、^{パクキョンジョ} 朴耕造 神父 [現、主教]、^{キムグンサン} 金根祥 神父 [現、主教] の 3 名が神学院に滞在されました。到着された日の夕刻、神学院の教師と学生はバーベキューでもてなしました。3 名とも私にとってはよく知っている方々で気持ちは楽でしたが、会の終りに朴神父が『今、韓国では多くの神父や牧師が民主化を求めて断食祈禱を行っています。そのことを覚えてください』と言われたのには、思わず身を正される思いでした。』『アリエル』17 号 (1987 年 6 月 2 日)

その年の 7 月、大韓聖公会の聖職およそ 40 名が、ソウル大聖堂で民主化を求めて 1 週間断食祈禱を行われたことを記憶している。正義と平和と真実への情熱。これが私が尹東柱から受けたものであり、大韓聖公会から受けたものである。

日韓聖公会の宣教協働が繰り返し新しくされることを願って、尹東柱の「新しい道」を読んでこの講演を終わりたい。

새로운 길

내를 건너서 숲으로
고개를 넘어서 마을로

어제도 가고 오늘도 갈
나의 길 새로운 길

민들레가 피고 까치가 날고
아가씨가 지나고 바람이 일고

나의 길은 언제나 새로운 길
오늘도.....내일도.....

내를 건너서 숲으로
고개를 넘어서 마을로

1938.5.10

新しい道

川をわたって森へ
峠を越えて村へ

昨日も行き、今日も行く
わたしの道、新しい道

タンポポが咲き、かささぎが飛び
娘が通り、風が起こり

わたしの道はいつも新しい道
今日も……明日も……

川をわたって森へ
峠を越えて村へ